水滸傳

水之卷二

五

ホ 2
4565
5

明ハ一利ろ
辨 9
巻 5

門 ホ2
4565
5

水火傳　水之巻二

○解詞扱

息吹神の御霊那ら言葉五ら故吾詞を天の御星ら友ら詞を教へらを知那ら解所を御星ら相ら雅俗を撰ら以朝昔及西東のらもらら甚日數のら方角のらを派ツイタチ。フツカらを音ら教有らを以那ら絶ら巻中ら俗を知らを事らも解分らを文字を離ら假字ら教らを專らの故那ら日數方角等のらを人らを知らを是を通俗ら假名ら詞の草を知る是を学者ら後世ら雅俗混雑らを既ら學者らを人らを數のを知方角のを知ら辟ら月を見ら月らの知雪を見ら雪らの覺是らも

事を足て心得吾既て俗なりを知らぬ假名を何の爲正す詞の草を
知るの爲なる今の人何の爲正めん訣を知らぬ古書を穿鑿して
違ふを一とするの故家國を治の教を遠漢國の書籍に有て
覚て近吾言音を教ふを知らぬ吾竊に思今の國学ふるを
俗学なる只徒に弄るを家國を治の用なるを忘れ神國の道
人に絶て上代の神の御代下代の人間の世に隔の故なる吾なる
詞を詳す若百に一法則に違ふ一花三輪の答あるを免めと
蒙らん

○五體之名

○頭

カミは火の美の昇なり此サカの二字を
天地の水火高昇を宰人胎内の水火昇極所の名那て故サカ代

云或カサ。カサ柳頭スル。サカ。カサ累如是サカの二言を高を宰那り

○天窓。アメは天なり又マは美なり則天霊なり天之御中主の神美備給云

名なり

○髪。カナの反アは天那て赤頭那て井に水火水の美を胎内の井の巻如
長なる髪

三に間毛なり髪髮児なるを回毛を皿の如毛を巻る児なり
俗に井なるを姑の如に井の美の巻如なるを四ノ巻五躰の
図に引合を見給へ

○耳

ミは水の美那て井の水右に掬る水左に掬る水を左右を呼
水水に名なり那て聞て其水に音の郷音なり

○額

ヒは息息の草て気の別なるを列なるヒの列を名那
故に右に鬢左に鬢云言郷音に和漢一なり

○眼（マナコ）

マナコ向ケテ十ニ双ニコヽ水火の凝テ水火凝テ双ニ名テ則右の眼ニ水ニ月ヲ宰左ニ火ニ日ヲ宰那ヲ

○睫（マツゲ）睫（マツケ）

マツゲニ向テ上ニ向テ下ニフタニ蓋ニ上下相向テ蓋ヲ宰那マツケニ向テ連ニケニ毛ニ眼の上下相向テ連毛ニ宰那ヲ

○眉（マユ）

マユニ向テ生ニ氣ケニ毛ニ左右向テ氣の毛ニ名テヲ

○口（クチ）

クチの反キニ生ニ氣ニ息の出入ニ宰の名テヲ

○唇（クチビル）歯（ハ）

クチヒルニ生ニ息ヒルの反フニ吹テ息吹所ヲ唇ニ名

歯ニ生ニ八ニ水火の兩ニ發テ上下兩與合テ水火ニ發の名テ白字白ニ訓テ八の字ニ成の故ニ葉笹橋端幅放羽皆左右兩ヲ宰那リ

○舌（シタ）咽（ノド）

シタニ生シタの反サニ生ニ宰易ニ五十連の音ヲ割別テ名テ咽ニ生ノニ出入息の正中ニ宰水ニ生ト與ニ息ヲ與所ヲ名テ祝詞（ノリト）

のリ言ヲ省テ則祝詞ヲ曰ニ生ノヲ皆言ニ宰言那ヲ

鼻（ハナ）

ハニ發言ヲアナのア言の省テ水火ヲ閉穴ニ名テヲ

頬（ホホ）

ホホニ生ホホニ本語フヽミの反ヒニ生ニ通音ニホホニ言ヲ左右ニ分ニ張の字那ヲ

顋（アゴト）

本語アカキトコロニ生アカの反アニ生トコロの反トニ生アキトニ宰アキトのキトの反コニ生アゴヽ

首（クビ）

クビニ與言ヒニ息の本ニ息ヲ與所ニ名那ヲ

肩（カタ）

カタニ擬言タニ列言ニ先右ニ擬列ニ名那ヲ

手（テ）

本語ニウテニ生ウテを起言ニ省テ言ウテの反エニ生エ肢ニ左右ニ別の名ニ三キニ生ニ水氣の氣ヒタリニ生ニ火畜の氣右の水ニ軒ニ昇の名左の火ニ童ニ降の名ニ水ニ月ニ東ニ昇火ニ日ニ

西に降則日月の出入左右に自在なるの御傳に擇尊誕生
の御像に自然の夫合なる
イヒに息響の約なる故氣に従て動なる
ムに渦巻言子に根に氣の渦巻に善惡の根を宰所の名那
故に六根清淨なる
ハラのラ言省に八に水火の發言故に水火の出に従て動なる
ホソの反ホ那に則一心の在所天に御中主神の宮殿なる息の根なる
吁吸の息此所に出五臓に此宮中に圍の九室に一コロに子コに
火の凝口に水の竭の夫に則心なる與合に⊙賀是此神夫天地
萬物に對て凝に動なるを心なる水火の凝なる凝を形の
見えなるを神に亦心なる

○指イビ
○胸ムネ
○腹ハラ
○睛ホソ

○子ホコ　ホに火なるコに凝に男子の一の凝に天御柱那に
○陰門ホト　ホに火なるトに與言に男子一滴の凝を與所に名那
則沙道穂狭別那に
○腰コシ　コに凝なるシを補言に省則氣の凝所に名那に
○尻シリ　シリの反シに入リの反シに則夫合に居所の名那に
○股モモ　モに舫言に左足の舫所の名那に則股に故に亦字を亦訓
○膝ヒザ　本語フシサフなるフシの反ヒなるサフ反ヒに故ヒザに
○掘節クルフシ　クルフシの儿の省なる
○踵カカト　カカメに活用トなるトコロの反に屈所に名那に
○足アシ　アに天地に同の水なるシに神言に省アに上に在アメに在
アシに天地草に名なる亦アシの反イに出息に宰故に其息

從て動てイクてイて息ノて與てて

○後前 ウヒロてウて起言て省シ呂反ソて背の炅てマへてマへの反

メて自て見の炅故て背てて方て後て見方て前て見てて

夜の炅見かて晝の炅てて那て

○天地

アメてアて五十連の総名て水那てノて水て同て那ノ千てノて水中の火て

火て續て那て千て水中の火て一て故てアメの水て輕澄昇てノ千の火て

重て降て水火相對て水て火の爲て同てアメて火て水の爲て續列て一て

てて是てノ千てての炅てて故て地のて中て倍てアの○外て擬て同其形

⊙賀是此○て見て天の廣大て知て正中のて見て地の小てて知て赤

○て見てアの天地の下て向て知て中のて見て地て中央て在て日て其

外て同てて知て然てて火て陽て現て天て倍○て陰て現て地て位てて其

て蚯降て○の根て與て筋て萬物て産是て蚯血根てて根て土て宰

岩根 阿良加根て 又根て皆土て宰て故て父の血毋の根て蚯血根て那て

○父毋。親

千千てて本語てタリ十那ててタリて反て千千てて則血血のてて其血血の炅

毋の方て顕て赤千乳十の名てて赤此乳の蚯て蚯乳根て挽詞てタて子

の毋て續て此乳のて那て然てて血て父の火てて稟て養て毋の水てて稟る

八八てて蚯血のて子宮て収其てて水て水火二て發て八八て八て發言

てて則發發の炅那てて父の火て童て降て毋の水て輕て昇て發の名

てて其水火の父て與て子て産是てオヤて親のオて起言て貴言

ヤてて父のてて父のて毋の○て父て與て其形⊙賀是則天地てて知那

○祖父。祖母

チヂチヂ千千の約千母千千の約千チヂ

チヂ則千又千の千又千千名ハバハバ故ハバハの約ハバハの母ハハ

ハバハバ

○伯父。伯母

ヨバヂヂヨヂ賤言チヂ千千の約チ千又千チ賤方の千又千チ名ハバ

のバハハの約のバハハ母ハハ賤方のハハ母名ハバ故伯父伯母父母双

○子孫

コチ凝の言男の水火の凝チ子チ子ハ子の子千ハ子の子千ハ

父の子の形假名の(十)子の子の形假名の(十)相似チ子チ父の

例チ従チ知ハチ▲マゴチ母の言チ母の水火の凝チマゴチ

○息子。娘

ムスコ▲ムスメチ父の水の三チ母の水の三チ合チ子のムチ睦の式ハス

チ一のチ父母の水を一チ子チ是チムスチ結の神チ火の子チ

男子チムスコチ水子チ女子チムスメチ子チ息の凝ハチ息子チ訓

○聟。嫁

ムコの本語チムスコハチムスの反ムコチ唱ムコチ唱チ別チ実チ息子

チ然チ五血チ別ぶチ唱チ別チ▲ヨメチ子チ與言チ水チ女ハチ

男チ與合チ子チヨメチ則與女の式ハチ

○甥。姪。従弟

ヨヒ▲メヒチ男の言メチ女の言ハチヒチイ息息の本チ息チ發チ故

五息チ發ぶチ子チ五子チ双チ男の方チヨヒチ女の方チメヒチ

ちちと▲イトコ〻ちイを息の言トを與言コを凝ちを息與凝ちを傳ちを
夫婦ちちちちちちちを名那ちを
○男。姑
シウト本語をシヒト那ちを音響音を唱をシウトちを司言ちを吾を字
人を男カちを▲シウトメちをメを女の言をを吾を司女を姑ちを
○君○臣
キミの反キをを火那ちを才三の反イを水那ちを合をイキ那ちを水火那ち故を君臣ちを
天地の水火をちを天陽を降を高物生君徳を恵ちを臣忠ちを盡相互ち
吟吸の水火をちちちちを御傳の名那ちを
○友。老。翁。老翁
トモちちトを與言モを舫言ちを相互ちを意を與舫を友ちを那ちを▲老ちを

才を貴言イを息を命那ち生那ち長生の人をちちを▲翁ちを
才を貴言キを息那ち生那ちを長生の人をを▲老翁ちを
キを終の言チを千の約ちを老昼ちる人をを
○兄弟。家兄。家弟
ハラカラ本語をハラカラ三を補言を省をハラカラ同腹ち生ちを
ちを那ち▲イロセちをイを息那ち口を場の言セを助の言ちを兄ちを那ち
▲イロトちをトを弟のを那ち▲五色のイロちを水火の凝場ちちを
男女の中のイロちを互を水火の凝場ちを那ち
○吾妹。吾勢
ワキモ本語ワカイモちちをカイの反キちをワキモちを吾妹那ち▲イモちをイ
ちを三氣モを舫ちちを男子の氣を舫ちを那ち后を唱を氣割の氣を

舫二三玉を割り出を子を那るの玉那る▲ワカセとり一セを助言て吾を助
人をを夫のを那るセを総て助の言を施主世話狩場の世子を皆
助を那る

○日本

ヤマトを文字の言マを水那るとも火那る天地の水火を文字を国名を
萬物生を字の國那る日本の文字をヤマトを訓を則ヤを文字を○
トを文那る此○を文を與を○智足其形矢的を故ヤマトを和訓を
ヒノモトを訓を正中のを開闢の火那る此を本を萬物を産故の本
の訓を則天之御中主の神○那る如是国名を矢的の其を挽詞
三十早振神を設を是那る其詠を次の巻枕詞を解所る

○山城。大和

ヤマシロをヤマを山那るシロの反ソを背の言を山を背を国名
の傳那る▲大和をヤマを山那るトを前の言を山を前を国名の御傳那る
山城の城字を借字那る実の城をヤマシロを高を借字を清音を亦ヤマトを大和の文字を義訓を言
和字ヤハラカを訓ハラカの反ハを則ヤハ那るハを和の通音をヤワ那る故を大を的
輪の字を大和を書此二の國を日本国名の其の備を國を君臣互を的
向の義あり其詠山登山背の山を射塚の字を○を向時を射塚の山を前を
見を臣北面を那る山登○を時を射塚の山を背を君を南面
を字を山背国那る故を大和を臣を字を山城を君を字を天之御中主神
神○を代を継を天皇の座給国那を明を然を神武帝大和
の橿原を都を定給を聖武帝難波を遷給を都を遷給ふ
を総て三十余り所五十代桓武帝を至を延暦年中山城国宇田邑を

改て平安城を定給へ然て高倉帝に及て一度福原に遷給へとも
亦再歸へ給て五十代に水火の五十連の數に當て自然天地の五十此
國の災を收此時を當て富士の煙の絶て総て天地の氣の收の時なる
事へ考て大古天の氣收て時を更て暖節を違て火雨降（火雨と水雨の借字）
霹靂（丈雨と丈雨と書て）雨降取て氷の降次て地の氣收て帝都定て次て人の氣收て
故に代に乱を那て今を異國本朝氣能收て國家平那て自然天地人の
水火の和すの故那て大に天地の氣に起て小那に人の氣に起て何
氣に成に成に成

○尊○帝

ミコトの三に水の訳コに火の訳トに與に言に其、火*○與に⊙賀是則天の御
中主の神に成に其神の御主に成に唱に成▲帝に成に三コトのコを カ

通に唱て那て然て成に成に成に三コトの唱に御言の響に成に事に三カトの唱に
御門の郷音に成に軽

○皇

スメカミの本語にスメルカミ那に成に成に皇に成に成に皇に成に成に赤
マ行を八行に移て渭言に成の例に成に成に成

○鬼神

オニの反イキを出息那ノ陰那ノ。カミの反キを入息那ノ陽那ノオニ▲カミを呼吸の水火なるノ出息を己ノ息を悪那ノ是を鬼と云入息を天地の氣なるノ善那ノ是を神と云鬼神原一なる両義ノ別ノ鬼神を表ノ常ノ己ノ呼吸の中なるノ御傳那ノ

○西東北南

ニシ云二ノ日月那ノシキシツの反ノ白月の沈方なるノ黄那ノ▲ヒカシなるノ本語ヒムカシ那ノ是を音響ノ唱をヒンカシなる由ンを省をヒカシなるノ則日向方なるノ那ノ▲三十三なるノ三那ノ十なるノ帝の詔ノ見言なるノ座なるノ左右正面の三方を見なるノ唱なるノ則三中見の字那ノ故なるノ三方を見なるノ方背姿の見なるを知なるノ行なるノ方暗所なるノを知の唱那ノ▲キタなるノキなるノ氣那ノタなるノ活用

天地の氣の密方をキタなるノ那ノ地なるノ北の方を低なるノ説なるノ覺東なるノ國土なるノ平那ノ地氣の低那ノ故なるノ岩根なるノ北の方を低ノ偶違土地なるノなるノ其山の裏なるノ山氣の無なるノ那ノ方角なるノ定なるノなるノなるノ本末ロ陽なるノ向なるノなるノ那ノ呂陽の方を南なるノ陰の方を北なるノ天地の氣高時なるノ暖なるノ低時なるノ寒故なるノ春なるノ氣高なるノ霞現なるノ月朧那ノ秋なるノ氣低なるノ霧なるノ現なるノ月明那ノ

○日數之唱

一日	ハシメノヒ	二日	フツカ（ツヽ言便）	三日	ミツカ（言便）	四日	ヨツカ（言便）
五日	イツカ（言ヒン）	六日	ムイカ（言ヒン）	七日	ナヌカ（ヌハナノ動）	八日	ヤウカ（言ヒン）
九日	ココノカ	十日	トヲカ（ト本カ共）	十日余一日	トヲカマリハシメノヒ	中暑	
二十日	ハツカ	廿日余一日	ハツカマリハシメノヒ	中暑		三十日	ミソカ
晦日	ツゴモリ						

ハシノヒ〻唱〻〻〻天之御中主神の〻〻〻天地開闢始〻〻〻の現給ふの
矣那〻故〻ハ〻唱〻那〻▲朝日〻〻〻ツキタチの音響〻〻〻月暗中〻始〻五
出の矣那〻月三日の明六時〻前〻三日五〻同▲フツカ〻〻〻カ〻暉別〻〻〻矣〻〻〻人の日の〻〻〻〻〻〻〻
旦一日一日〻照暉〻別〻〻〻〻〻〻〻〻那〻故〻二日〻〻十日〻〻〻カ〻唱〻〻〻只晝夜の
別を指〻〻〻那〻日字〻カ〻訓〻〻〻矣訓那〻十日終〻〻〻赤始日〻十日餘ハシノヒ
〻〻〻〻天地開闢の⊙の矣〻〻〻〻十二日〻〻〻二十日〻〻〻〻〻赤前の如〻カ〻唱〻〻〻〻ハツカ
〻〻〻八〻〻〻図の〻〻ツ〻續言カ〻暉別言〻〻〻十日十日の兩續別〻〻〻〻矣那〻
此二十日終〻〻赤始日を二十餘ハシノヒ〻〻〻〻赤開闢の初の⊙の矣〻〻〻二十日
〻〻〻〻三十日〻〻〻〻赤カ〻唱終〻一日〻〻〻〻〻〻〻〻

時々に則與氣の天那り四時時々其節々の大々々々々々コノ々々コ々
凝々リ々を與詔言を細々る〻を與を刻々に則凝與の天那り在年月日時
刻の順々々々謂ビ〻々元旦の曉々起々天々御中主神の〻那り此々を與て
刻々々々此刻々を與々與氣々々與氣約々晝夜々々晝夜約々月々
々々約々氣約々年々那り故々トキの反(十)那りツキの反(十)那りトシの反(十)々々皆
同天那々々々々甚天同一那々々千々の言那り故々此三の千約々亦大晦日の
◎の中々〻〻現々一年々産那り〻〻火々々文那り◎々水々々毋那り故々年德
神の女神那々々是那り▲コヨミ〻〻コ〻〻〻那りヨミ〻ヨミ〻蒲々ヨ〻與〻〻
年中の〻の凝々る時日の節々を與令〻〻〻〻〻那々
◯蚩尤。撞。餅
此三品々年の始々備〻〻〻〻月日時の天々の故々甚訣トシカミの反

(十)那り則神の御天那りトキの反(十)那り古語々時々思々〻〻〻〻〻の
詔々〻列言刻々の〻々刻の天那り此思々天合草々代々蚩尤々備る
ツキの反(十)那りタヒタヒの反千那り故々月々代々撞々備〻日々ヒ千天同天
〻〻ヒ則(十)那りモチの天千那り故々日々代々餅々備皆年神の天の千
合々月時々天合々々を集々備那り此餅々カカミ餅々唱々々鏡の
本語々カケミ〻〻カ〻通々カカミ〻〻影々摸々見の名那り此餅上の
小々々々●〻〻大々々々○那り是々與宣々⊙賀是則天之御中主御影
々〻月那々〻●〻地々〻○海々〻●〻男那り君々〻○〻女那り臣々〻是々
與宣々亦⊙賀是天地開々〻月相對々照女男君臣の道正々國土
全々々天神地祇々御影々摸々備々の御傳那り
◯晝。夜

七八ゝゝ七ゝ正火の日ゝゝゝ儿ゝ助言ゝゝゝ省大陽の日ゝヒ儿ゝゝ那ゝ
夜ゝゝ日ゝ與ゝゝ那ゝ晝夜の與合ゝゝ夜の八時ゝ七時の差別ゝ在ゝ晝ゝ
閑夜ゝ與ゝゝ天地の水火閑合ゝゝ那ゝ

○左夜。宵。左夜中。夜中。左夜更。夜更。夜半

サヨゝゝ八ゝ廿ゝ短言ゝゝ絡ゝ夜の短ゝ宰那ゝ左夜明ゝ明ゝ續ゝゝ付ゝ
更ゝ夜の明ゝゝ言那ゝ詞の與所ゝゝ泥ゝゝ▲宵ゝゝゝヨウヒの口言の
省ゝゝ初夜のゝゝゝ五時ゝゝ▲并詞の續ゝゝゝ夜のゝゝゝ▲左夜中
ゝゝ廿ゝ女の言ゝゝ四時過ゝゝ▲夜中ゝゝ暮六時ゝ明六時ゝゝの正中ゝ當
ゝ九時ゝゝ那ゝ▲左夜更ゝゝ廿ゝ女の言ゝゝ九時過ゝゝ▲夜更ゝゝ八時ゝ
ゝ此時ゝ陽氣陰中ゝ潛ゝゝ是ゝ夜の胞衣ゝゝ又ゝゝ鳥王の又
ゝゝ暗言ゝゝ胞衣の言那ゝ此時刻ゝ鳴鳥ゝ鵺鳥ゝゝ何の鳥ゝ

ゝゝ定ゝゝゝゝ吳極陰中ゝ鳴鳥ゝ指ゝゝ那ゝ此陰中の胞衣ゝ閑ゝ
陽の前ゝ合ゝゝ指ゝ夜半ゝゝ八時ゝ七時の差別ゝゝゝ日ゝ與ゝゝ
八ゝ放言火水與人の放時那ゝ是ゝ告鐘ゝ夜半の鐘ゝゝ

陰ゝゝ鵺鳥ゝ夜更ゝ鳴鳥ゝゝ萬葉ゝゝ侯說ゝ頼政の射られ
ゝ祇ゝゝゝゝ是ゝゝゝゝ思ゝ僻ゝ那ゝ寅ゝ申・己
ゝ猪早太ゝゝ說ゝ甲ひのヒ自ゝ當蟇目の行ゝ画ゝゝ八ゝ
世ゝ比ゝゝゝ鵺ゝゝ画ゝ世ゝ比ゝゝゝ鳴絃の德ゝゝゝゝ
赤日夜半のゝゝ夜半鐘ゝ心得人ゝゝ半ゝ半ゝ九ゝ
割ゝ千カゝ中の言ハゝ放言ゝゝ放ゝゝ月ゝ半輪月
ゝゝゝ吳十人分の言の缺ゝゝゝゝゝ正中ゝゝ缺ゝゝゝ
吳相對ゝ缺放ゝゝゝ宰語ゝゝ既ゝ唐詩の夜半鐘聲の語ゝ
合ゝ知ヘ後世の學者多ゝ誤ゝゝ

○曙。東雲。曉

アケボノゝゝアゝ天那ゝケゝ差別の言天ゝ海山ゝの差別の分ゝアケゝゝ木ノ反ホ
ゝゝ那ゝ天地の差別ゝゝ分ゝ曙ゝゝ▲シノノメゝゝシノ反ソゝゝソゝ背の言形無言

総て隠れたる事を言ふ詞なり。芽の萌出て恵を出す事を言葉なり。陽氣陰中に潜て動き東雲に其時明かなる事を雲の見かくれて東雲の字を借用ふ。シノの語蔵を言ふ例シノヒ。シノク。シノ。繁き鳥獣の蔵れ帯のシノ中に蔵て有れば▲暁にアカリキ那を助言に省て

アカリキとは明分る那

○暁月夜。夕月夜。朝月日

暁ツクヨは本語暁キテル夜なれば那キテルを反てツクヨは東の空明所に有明月の影薄照るを月夜の暁は▲夕月夜とも

コヲリキテルの反て夕月照るを西の空に暮ぬる東の方に月昇る照

る那▲朝月日とて朝キテル日の反て西に有明の月の影を省て東に日の照昇る那月字ツキ訓て点の月のことを知るツクヨと

て時に照方に用ふ。ツキヨと訓時に月の方に用ふ

○月桂

カツラは言ツラ列言ふ月の影のことを那扨影に躰用の両

系に躰を謂て月に水の呈那に高天に侍る磨て鏡を拭ふ

其鏡に地の形を移す月中に暈に則地の影那是を月桂と那に赤

用ふ月の光地に照て萬物の陰地に暈に是をツキノカツラ

に総て天地相對に暈にもツキノカツラ既に月中に

桂木に成て月中の影の桂に木に設に実に桂の木に成て

月中宮殿に成て右に同満月十分の光差に宮殿を建て皆

設に詞那月中に水に桂木に成の謂に宮殿を建て所謂

繒に書に詞に眼に見に方便那に

○月桂男。月人男

月ノ桂ヲ〻〻月〻氷〻〻女那〻カ〻〻影ノ言ヲ〻〻火〻男ノ言月ノ影〻
火那〻〻〻〻〻月影ノ光〻〻人那〻文字〻借〻〻〻女ノ用〻男〻〻〻ノ心那〻〻
▲月ヒト男〻〻ヒ〻火那〻ト〻與〻〻〻〻〻月〻氷〻〻女〻〻〻光〻火〻〻男那〻
氷中〻火〻與〻光〻〻〻〻月ノ照〻〻〻那〻皆月〻女〻男〻〻文字〻借
〻〻那〻

○雨風

アメノアメ〻空中ノ氷那〻〻〻〻〻言那〻空氷ノ氣澄昇〻〻夫ノ火氣〻和〻
降〻昇〻〻降昇〻降〻〻氷火同〻〻氣〻氷ノ形〻〻〻降〻天同〻〻昇間
〻眼見〻八卦〻見〻人間旅雨〻〻〻〻〻空中〻在〻降〻〻雨〻〻地〻零
〻〻氷〻〻▲カセ〻〻カ〻〻言〻言セ〻與〻言〻天地ノ氣吹〻萬物〻當〻與〻

是〻風〻〻〻則氷火ノ動那〻

○露。霜。氷。時雨

ツユ〻〻ツ〻原シノ同〻那〻地中〻上シノ氷草木ノ正中〻昇天ノ火ノ炎
〻和〻氷中ノ火〻〻〻是〻ツ〻〻〻ユ〻〻〻火和那〻氷火和〻玉〻〻〻ノ名那〻
故〻草木是〻爲〻育是〻名爲〻實〻〻〻〻秋〻〻〻〻那〻霜〻〻〻〻
地〻上氷ノ言モ〻舫言〻〻氷氣地上〻昇〻天ノ火ノ炎〻和〻凝舫是〻霜〻
ツユ・シモ〻向炎那〻名〻別〻〻〻時〻〻和是露霜〻與〻〻〻時〻濡〻〻〻露
〻〻玉〻〻〻〻〻〻霜ノ〻萬葉〻露〻霜〻讀〻〻〻〻是那既〻古今集〻
露〻〻〻〻〻〻

火那〻〻〻氷川。薄氷。氷室。氷雨〻〻訓那〻露霜氷〻次第〻〻火の氣
氷中〻凝〻場那〻〻〻邑里の凝場〻〻名・箇〻〻〻物〻凝場〻〻名那〻
シグレ〻〻シ〻氷那〻グレ〻暮の言〻〻氷氣天地滿〻〻暗〻〻〻則氷暮の式
那〻故〻シグレの雨〻〻那〻〻〻〻〻〻〻泥〻〻〻氷氣〻〻時〻自然〻雨〻〻〻故〻
〻〻時雨〻〻〻〻〻〻〻雨の〻〻〻〻〻〻〻

ヤマ〻〻ヤ〻火水の二〻〻則女男那〻〻〻向〻〻〻高〻男〻〻〻低〻女〻
〻〻高低向合〻〻〻〻〻ヤマ〻〻故〻山は女男の名あり〻香久山は女山歟
耳梨〻〻男山筑波山〻女男の名あり〻真形絶〻〻〻賀定那〻〻名〻〻峯〻
〻〻〻〻水那〻〻子〻根〻〻則水根那〻雨降〻地〻隙〻高所〻初〻故〻
水の根〻〻山の高〻在泉〻〻〻イツ〻出〻〻〻〻水〻〻地中〻〻〻出水〻
則出水那〻〻源〻〻〻〻〻

よかるべし▲甚地を指ていふ名那り▲十八シロ〻十八〻十八の通音那シロのシロ水
たり口を圍ていふ水を囲て苗を育の名那て甚囲て畷をクロ〻ふクロ
土の夫て土て用て名て クロて那り代字をシロ訓て代訓
中ていふで苗を代の義て那り総て代金て物て代金て代物て
訓て金て代物て言那て

○川橋 箸

カハて カて掛て ハて二の字て則左右て故水を中て掛て左右の岸を字の
名て文字を書て中の畫を先て左右を後て和漢て天地
自然の法則那り カハの二言て総て中て物を掛て外て名て那り甚例草木
の カハ 皮 草の カハ 皮 て総て中は身を包て井戸ガハて中水を掛
て外て名て辟を西側東側て中は道を掛て左右て名て甚餘此例は

て ハて二本を字の名て ハを神言那て ハを総て左右上下の両を字の例
ハサミ鋏 ハカマ袴 ハ歯 ハ巣 ヨヨ ハシメ始 ハナレ抜 甚餘是て

○瀬見小河 飛鳥川 飛鳥風

セを瀬て二を正中を字言那て故破河の瀬の正中て此方彼方を細流水
セを セミノヨカハ小河て定て地名ぞ那て破河を名那
或書て曰見囘加茂河而言雖枝女敷石河清河在号石川瀬見小川在て
て可知▲アスカ川を本語をアスカ八川て名那てアスを明日て カハの反カ
て ルを助言て省てアスカ川て大宇日明日石河の瀬の変川の那り故総て
変て借て河那て大和て飛鳥川て甚川て限て名て
故東て讀て寄て見由て虎へ▲アスカ風て変風の那り新後拾

約めて見れば海に入る時は飛鳥と
文字を借りて訣鳥と書きて今日は明日宿を替えるの意に假
りたるなり

○天掃立

アマと海郎那り天を借字ハシと掃那りタテとタテの約テ那りテアマの
約テなれば夷合をタテと手當の那り軍用の楯タテなれば敵防
手當の名那り此天掃立なる海郎の小舟の棹なれば手拭なる例を
なれば何頃なれば詩なれば出雲風土記なれば書なれば神代は神の天を昇給
時の橋桙の石倒れ埋れ例なれば在り近世の學者なれば著れる事記傳
なれば書なれば證據引きなれば吾友なれば人の語なれば笑堪なれば神の形
なれば見なれば無なれば在て人間是なれば次是を神なれば神の天を

昇給の時人間形勢のなれば掃なれば射なれば思れば己れば身を比なれば神と尚
なれば無差別の說なれば出雲風土記なれば後世の作なれば登明那り思れる人を
なれば捷なれば猥なれば書なれば著愚れる人を喜書を見る人を語近世を作書律
のなれば茂れば道を文なり

○海　稲津海

ウミとはウを動言とは水那り水中の火の水を動をウとは則水火水なり
此ウ言を夷なれば省なれば後世の人を猥假なれば省なれば心得や萬葉
集解なれば書の古訓は石見海なれば海なれば海なれば海なれば海なれば
なれば同集は淡海之海なれば海なれば見れば例なれば心得なれば誤なれば淡海
之海なれば訓なれば省なれば約なれば那り本語なれば八ウミ如ミウなれば那りハウを
反なれば アフミなれば ノなれば如の言ミウこの反なれば アフミノなれば訓なれば那り則淡海如

なる湖なる那り既に遠江なるなる本語なるトホツアハウこなるなるツアの反
タなるなるハウの反フなるトホタフなるなる那なるウ言なる詞の中なる約なるお省なるなる
なるなる▲和田津海なるなる本語アワタツウなる那なるアなる起言なる省ツウの反ツなる
ワタツなるなる白沫立海のなる那なる故なる曷葉なる白綿花爾波立なるなる讀
續なるなる

○ 天原　青海原

アなる天那なる海那なるなる向那なるハラなる廣なるなる天なる海なる向伏なる廣大
なるなるアマハラなるなる▲青海原なるなるアヨなる蒼なるウナの反アなる
天那なる海なる天なる海も青一色なる向伏なるなるアヨウナハラなる那なる唱なる
別なるなる其義同一那なる故なる土州の日記に仲麻呂の哥に青海原なるなる
此例那なる延喜の頃なるなる言葉の正なる是等なる知なる那り

○ 濱　浦　嶋　浦島兒

ハマなるなるハなる水人の兩なるなるマなる向言なる間なる引波の水際なる打なる波の
限なる向合なる間なる宰なるハマなるなる那なる故なる曷葉なる白浪濱松枝なる續なる
哥なる此所謂なる畧解なる書なる白浪濱なる續なる古哥の例なる書誤
なるなるなるなるなるハマなるなる語なる踈の故なる▲浦なるなるウラの反アなる海なる故なる
海なるウラなる亦ワ行のウなるなるなる時なるウラの反ワなる土なる故なる固なる亦ウラ
なるなる何兩哥なるなるの名なるなる古哥なる浦乃名家能秋乃夕暑なるなる固那なる
亦明石乃浦能朝霧兩島隱行舟なるなるなる海なるなる▲嶋なるなるシなる水
マなる同言なる水の山なる擬なる向なる名なる布の縞なるなるシなる水マなる向なる則水の形の
向合なる名なる其形水向那なる▲浦島兒なるなるウラの反アなる海なるシマのシを
省なるマなる郎なる則海郎児なるなる那なる詞の反合なるなる浦島が児なるなる那り

浦島太郎ちゝゝ浦島ゞ太郎のまちゝゝ

○船帆櫂楫碇

フナゝゝ本語アフナ聖ちアゝ起言ゝゝ省ゝフナゝゝ男子ゝ伏寐女子ゝ
仰寐ちゝゝ女の仰寐の形ゝ名ゝまゝ故ゝ船神ゝ女躰那ゝゝ艦ゝ髢也房ゝ蚤
或ゝゝ毛綱茅ゝゝ用▲帆ゝゝまゝフクロの反ゝゝ風ゝ納袋ゝゝ名那り▲櫂ゝゝ
カゝ別言イゝゝ氣ゝゝ船の氣ゝ別ゝ名ゝゝカイゝゝ▲楫ゝゝカゝ別言チゝ道
の三ゝ省ゝゝゝ舟の道別ゝゝ名那ゝ徒者士ゝゝゝ道別の士ゝゝ馬ゝ郎ゝ
歩行ゝゝ行ゝゝゝ馬ゝ郎ゝ自道別ゝ行ゝ舟馬ゝ乘ゝゝ小道ゝ歩行
道ゝゝ自道別ゝ行道の名那ゝ▲碇ゝゝカリの反キゝゝ則イキゝゝ船の氣ゝ
休ゝゝイカリゝゝ聖ゝ既ゝ萬葉ゝ近江海奥撈船室下藏公ゝ事待吾序
ゝゝ在船ゝ女躰ゝゝゝゝ多ゝゝ意の讀合ゝヒタの嬬迎舟ゝゝ甚系那り舟ゝ

フクロの反ホ那ゝホドの反まゝゝ隱門のまゝ合ホ言のまゝホコの反のホゝゝコヲの美
合ホ皆女男のまちゝゝ

○澪標

ミヲツクシゝゝゝゝ水ゝゝヲ終ゝゝゝ盡ゝゝゝ印のゝゝゝ真水の
終ゝ盡印ゝゝ名那ゝ真水ゝ水の境ゝ印ゝ建ゝ漕来船ゝ深ゝ淺ゝ
知ゝゝの目印ゝゝ故ゝ身ゝ盡ゝゝゝ思の深ゝ淺ゝゝ合ゝゝ那ゝ

○汀 灘 難波

ナキサゝゝゝゝ

○松　玉松　玉柏　比多擅

マツとは向言ツは續列なり二葉相向て列らなる那り松の葉の先の長き
水を穿穴の短き火を穿て則天地女男の水火の與合なり故常盤なる列
なる葉數の多きもあるなり千代萬代のなり玉松と手聚て
マは股の言マツは向續て手の股の如き五向て續て名て五葉の松なり那り
近世の俗説に玉松と云て山松の誤なり詞疎の故那り玉柏と
タマは手向なり カシハのカシの反手なり木那り八葉なり手と向て如の葉の木なり
名て則松の言なり扨此カシハは唱て木の葉なり那り然る諸木の中に松
ばかり葉の凋て木なり高木は勝て葉の存て名て松は名て既柏手なり松
の葉の都て手打合すの唱なり又字も松柏と與なり女柏男松なり那る今一
種の柏なり雜木の中も勝て常盤なる葉の凋ざる故

カシハの名なる那り 玉椿 タマは手向なり ツは列言バキは葉木なり手を
向て如の葉の木なり名て松の那り故八千代なり那り椿は借字なり
俗説に玉椿と言て省てツバキと此木諸木は勝て葉の存て名て花の散易木なり
八千代と云へるの弟なり 比多擅 ヒタの反八なり面タの反八なり合なり カシの
反手なり木なり則三葉の木なり名て松の那り

○嚴擅　五柴　五尤右草　草根

イツカシは木なり氣なり ツは列言カシは木なり水火列木なり松なり
イナシバは千の千なり通音なり イツは氣列なり シバのシは レは木の反ハは
葉なり水火列葉なり名て松の那り芝 推柴 摘柴 皆葉の茂なり
柴は草なり イツは五なり マは向手なり草の天辛なり

木と草と本同性なれども後なれども故に木と草とを則イツマテ草とも五の指を向合
なれども木なれども五葉の松を子那なれども草根なれども木の根なれども松なれども那松を
根なれども諸木は勝れども草は根なれども搦れども生の故なれども既根延の松を殊陽
木なれども長生那なれども萬葉岩代乃国能草根平伊坐結天なれども草根なれども松那
同集 在根良もじ訓根松なれども近世の俗説草根なれども草めなれども僻
なれども

○玉藻　王蔓雑　王笹帚木　王藻

タマカツラなれども夕マと手股のモカなれども搦なれども列なれども手の股の如き續列なれども
名なれども蔓なれども夕マバキなれども夕マバキなれども手股葉の義なれども八キの八
の二凝なれども笹帚のなれども手の股の如きなれども葉の松を束なれども帚なれども那なれども夕マモなれども
タマなれども手股なれども モなれども舫なれども手の股を發なれども如舫なれども草なれども名なれども夕マを

手股なれども詞の躰なれども玉なれども設なれども詞の用なれども

○紅葉　柞

モミヂなれども本語モミダシ那なれども夕シなれども約なれども モミヂなれども陽氣陰中なれども舫なれども紅
の色を搡出なれども夕日は空の丹に同故に諸木モミヂさなれども以ても能
染なれども楓は名なれども紅は染なれども綱なれども モミなれども此は那は倍は穢袋を
モミヂ代袋なれども モミタレ袋の袋那なれども八ソなれども八は葉なれども ソは白なれども
染なれども白の葉なれども葉は葉なれども染なれども名なれども

○櫻　梅

サクラなれども サは昇水の昇なれども クラは反カなれども カは暉火の昇なれども此サカの二言は天地
の陰陽十分なれども澄昇の氣那なれども是は名なれども サクラは故に陽氣發に從て花を開
此サカの昇 サカル。サカエ。サカモリ皆陽氣進のなれども サカイキなれども胎内の氣頭を進

の唱ふる月代文字借訣ふる日進昇ふる月代ふる義假字ふる氷火進のふる形ふる

ウメふる起言ふる省メふる同ふる陽氣陰中ふる同ふる芽ふる出ふる

名ふる梅ふる故ふる梅ふる萬木ふる勝ふる実中ふる芽ふる出ふる花咲 梅の假字十八用ふる是ふる雜波

津爾咲也吉能花冬籠ふる讀ふる梅ふる指ふる柄然

○ 橘

タチハナ

タチハナふる五ふる八ふる葉ふる放ふる十ふる双言ふる葉の列ふる揃ふる能立放

ふる双ふる名那ふる故ふる総ふる物ふる對ふる立双のふるふる古昔ふる御階の御

外手の右近左近の陣ふる片ふる降見のふる芽ふる出ふる実の梅ふる左ふる夫ふる立

双のふる橘ふる後ふる梅ふる櫻ふる代ふる考ふる樫ふる陽ふる陽氣進昇の

三柔ふる神德益昌ふる進給ふの時ふる從ふる天地の自然ふるべし賀是

此二木ふる天德ふる布ふる草木芽ふる出ふる君德ふる下ふる臣目ふる出ふる義ふる橘の立双の

系ふる形ふる故ふる葛葉橘之薩履路乃八衢爾物乎曽会妹爾不

相而ふる在言ふる女男ふる志ふる放ふる双ふる橘の薩ふる設薩ふる居ふる道路を

路の八衢ふる設甚八衢ふる妹ふる心痛ふる設ふる寄那ふる青集ふる然者

社歳乃八歳叫鑽髪乃吾同子叫過橘末枝乎過而此河能下文長汝情

待ふる在言ふる然者社ふる女の男ふる合の詞ふる歳乃八歳叫鑽髪ふる八歳の

時鑽ふる髪のふる延ふる式ふる五同子叫過ふる直髪の延ふる身ふる過ふる

ふる那ふる橘末枝乎過而ふる君ふる立双ふる橘の末枝のふる月ふる会那ふる

此河能下文長汝情待ふる私の成人ふる君ふる仮合頃ふる此河の底行水の

ふふふる長待給ふる嘉ふる青集橘本我立下枝取成哉君間子等

ふふふる総ふる橘ふる呂ふる讀人ふふふふふふふる橘の昔ふる薫ふる立双

ふる昔の情自ふふふる那ふる

○ 山橘 枳

カラタチ

ヤマタチハナ〻〻山に生る一種〻〻藪柑子〻〻是〻〻足引乃山橋〻色出
而〻〻讀〻〻名阿部橋〻〻〻〻阿部橋乃蘿生左右〻讀〻〻藪柑子
〻〻〻〻

氣則キ氣那甚氣水火閑水を宇を草を文を宇を
木を草木を木同性を故を松を草を人松の所を草を キ甚例ギ
アウキ アギ フケギ フキ ススキ キを皆草の実を故を天地のキを能
知を花咲實書を葉を閑を夜を葉を合を眠も氣の自然を

○稲

イネ イキ イを息那ネを根を則息根を命を宇をイネを号五穀
の総名を穀を名を貴を在を米を名を萬葉を伊禰都
氣波可加流安我手宇許余比毛可芽能乃和久胡我芽宇氏玉氣可武を
を米を限を総名を知

○萩　荻

ハギ ハを初の言キを草の実を秋の初を花咲を名をハキを云

ヲギを ヲを終のキを草の実を秋の終の草を名を荻を
此両の草を相對を秋の始を終を宇を文字を帝自を相對を甚形損似
を自然を

○菊　蓬

キク キを氣那クを興を天地の水火を性を名をキクを天
地の氣を興時を心を秋を能天地の水火を興故性を遅を手を
寿天照太神伊勢国を坐を天地の氣を興給を御末の御紋を菊を負紀
手中渡を名を漢名を蓬を僻を那を些草種蒔在を ヨモギを興筋氣の名を
其項異を花の渡を元来毎を咏名を舎の唱を稚を那
故を人の氣を興筋を灸を長生を宇蓬茉蓬洞を菊を同性那を

○河原蓬　数冬　除麻

カハラヨモギを野菊を同を数冬

ヤマヽ山ヽフヽ太ヽキヽ少キの約ヽ山太蓋ヽヽ名石蕗ヽ
本語ヽアヽハブキヽヽアヽ起言ヽ省ヽツハフキヽ草葉蕗ヽ
那ヽ蕗ヽヽヽヽ人是ヽ喰ヽ酥蘇ヽヽ此花黄ヽヽ数冬の花餘
似ヽヽ故ヽヤマフキヽ唱山富貴の郷音ヽヽや人能愛ヽ俗ヽ萬金ヽ指ヽ山吹
色ヽヽヽヽ自然山富貴の美人ヽヽヽヽ

○ 藤蘭

フヽヽヽヽ青丹の和色ヽヽ本語ヽフタアヽ井ヽヽ夕アヽ井の反ヽヽフヽヽヽ両天井
色ヽヽ薄紫の色ヽヽヽヽ両の色の美ヽヽヽヽヽ春夏の二季ヽヽヽヽヽヽ咲
亦一名二季草ヽヽ名那ヽヽヽフヽヽハカマヽヽヽフヽヽヽヽ藤ヽヽヽハカマヽヽ袴のヽヽヽヽ藤色
の袴のヽヽ草ヽヽ名那ヽヽ亦此草の同性ヽフヽヽヽ草ヽ音便ヽ唱ヽヽフヽ
ヽヽ則ヽヽヽの反ヽヽヽヽヽヽ

十ゝ二つゝ小ゝ八ゝ大ゝ五十連の氷ゝ十行ゝ大ゝ鳥ゝ甚ゝ自ゝ
備ゝ花ゝ跡ゝ穴ゝ中ゝ實ゝ蓮の如の形ゝ現在ゝ未の形ゝ
ゝ草木の仁中皆二葉の形ゝ備ゝ此草一種異那ゝナデシコゝ
十ゝ頭のゝ二ゝ夕レの反ゝ頭の低の夢ゝシコゝシゝ昇氷夏ゝコゝ
凝ゝ此草頭低丈ゝ延ゝ名ゝナデシコゝ甚ゝ撫子の天ゝ
借ゝ▲シコ草ゝ氷凝草那ゝ昇氷ゝ是ゝ爲ゝ身ゝ其氷凝ゝ
身の草ゝ名ゝ萬葉ゝ鬼ゝ四忌手ゝ指易而將宿君故ゝ手氷凝
ゝ癒ゝ病の君故ゝ那ゝ赤鬼ゝ益ト雄ゝ心氷凝ゝ直ゝ
故ゝ鬼の字ゝ借ゝ
○千草　旗芒　志太草　忘草
千ノ草ゝ千ゝの草のゝ別ゝ定ゝ草ゝ雜草ゝ那ゝ▲ハタスキゝ本語

ハタレススキゝ助言ゝ省ゝ▲則葉ゝ芒ゝ草ゝ葉の
風ゝ靡のゝ旗字ゝ借那ゝススキゝ直のゝキゝ草の夏ゝ直
ゝ草ゝ名那ゝ▲シダ草ゝ爲限ゝ列ゝ時ゝ刻の爲限ゝ列
ゝ草ゝ時ゝ那ゝ故ゝシダ草ゝ時草ゝ年中絶ゝ生草の
ゝ別ゝ名ゝ雜草ゝ那ゝ▲ワスレ草ゝ漢名萱艸ゝ是ゝ此
草の名ゝ借ゝ物忘種ゝ物思ゝ何ゝ紛種ゝ
辱び草双帝ゝ忘種ゝ俗ゝ思種膳焦種ゝ皆類語ゝ萬葉ゝ
吾屋戸夢子大草雖生意忘草見不生ゝ物忘種ゝ草ゝ
ゝ萱草ゝ林ゝ忘種ゝ用ゝ知ゝ
○葭　葦　女郎花　葎
ヨシゝヨシの反イゝ入息の夏ゝ▲アシゝアシの反イゝ出息の夏ゝ

此所の草〻地中の水火〻生〻出水火を穿〻アシを生〻入水火を穿〻ヨシを生
故〻海中の水火の新宮江〻多生す海中の水火〻陽〻向〻吹玉ふを〻東南の
〻〻〻多生〻西北の地〻女草生所〻土肥〻測〻〻〻瀬も東南〻多
〻〻西北の地〻多〻天地の水火〻総〻陽〻進の故〻〻（お菴〻ふ多の満干の説の所〻合〻可知）▲ヲミ
ナメシ〻〻〻ヲミナ〻女那〻メ〻女〻〻シ〻神言〻〻省〻女〻ふ名〻故〻文字〻
甚〻〻〻〻▲ムクラ〻〻〻ムク〻渦菴〻〻クラの反カ〻〻〻ムクの反カ〻〻〻呉合〻〻
則草の渦菴茂〻〻〻〻

故〻慇懃〻續き〻其訣アモコロ〻〻アと根き〻モと舫き〻コ〻凝き〻
口〻場き〻則根舫凝場の心き〻是〻故〻續き〻

○ 杜若　菖蒲

カキツバタ〻〻カキと垣き〻ツと列き〻ハと葉タ〻多〻〻と垣〻多列葉〻〻ふ名
き〻故〻文字も若杜〻書布萬葉〻垣幡丹頰紅君叫率爾き〻も書
た〻〻アヤメ〻〻アヤと文那〻メと子き〻アヤメナの三言の通音の例〻と則文根の心
那〻故〻根〻東〻ふ布文目の若〻ふ轉〻文目〻〻めと自〻似〻草〻て其
文目〻〻字き〻〻

○ 瓢子　酸漿

フクベ〻〻本語〻フクレフクレ〻ふ〻き〻を上のフクレの レ言〻省下のフクレの反へ〻と
フクベ〻〻那〻上も脹下も脹〻ふ名き〻〻ホホツキ〻〻ホと口の反のホき〻ツと

包〻キと草の実〻袋の内〻袋と包〻る草〻〻つれ那〻酸漿の文字〻其味
の実〻〻〻〻借〻き〻実假字き〻

○ 雞頭　葵

カラアヰ〻〻カラと掛〻アヰと天井き〻紅の〻那〻雞頭の文字〻兒へ〻ふ萬
葉〻秋去来者後毋勢武登我蒔之雞頭乃花乎誰可摘劔〻き〻可良
エヒ〻〻可良天井〻〻ふ同〻那〻▲アフヒ〻〻アフと仰き〻ヒと日〻日と仰
草〻〻ふ名き〻神〻日大神の御末き〻め神事〻用き〻〻宜き〻

○ 蕨　紫蕨

ワラビ〻〻ワラの反ワき〻輪き〻ビ〻マキの反ミき〻マと行〻ハと行〻移〻渭の例き
ビ〻〻ふ蕨〻輪〻巻草〻ふ名那〻▲ゼンマイ〻〻セと スと卍の反ン〻と言郷音マイ
〻マキの音郷音〻〻センマイ〻〻ふ末実色〻ふ花き〻〻此草蕨の実〻〻き〻め

紫蔚（ムラサキフジ）と文字を借りたり

○牡丹　芍藥

ボタンと漢名なり和名フカミグサと云つて太（フトシ）く力（チカラ）の約キなる氣（キ）なり太氣（フトシキ）の草なるゆえ赤フを富（フ）の郷（ヒキ）音キと貴の響きなるを轉用して富貴の名なり▲シヤクヤクは漢名なり和名カホヨグサなり力を香（カ）あらず浮（オノメク）と云ふ活用て香（カヨ）能（ノウ）火浮（オノメク）草なる名なり

○搘（ニスエ）　末搘（ホスエ）　末（ウラ）　末（ウレ）

コズエなる末（コヌレ）の末を字て云ホスエなる穂末（ホスエ）の義なり葉を字て云ウラなる末も葉なり紐を云ウレなるウレの反エなり枝の本の枝を字て云ウレなり

○牛　馬

ウシと起言なり省シて昇水の昇なる萬物の正中を昇水なり此水を字てウシなるなり▲ウマと起言なる火中の水昇なる萬物を養の潤なり此水を字てウマなる那り故馬を湯なる洗牛なる水なる洗なり牛の昇なる草の正中の光なり昇なる角馬の昇なる草の外なり潤なる養なる五穀を作る能人の労を助なる喰なる己の昇なる養を喰人の労を喰なる是皇國の昇獸なり漢國なる麒麟なる昇獸なる古昔在なる今なり皇國の昇獸なる古人なる絶なる無なる貴なる武在なる貴なる武人間なる人の間なる貴なる多なる賤む漢國なる人の間なる神なる人を賤なる多なる貴む故なる此昇獸皇國なる牛なる寓なる故なる黒牡丹なる馬なる白なる故なる口の及ソなる故なる馬字なるソの假字なる赤白馬節會なる馬の音イなる十なる馬聲の文字なる馬聲なる訓牛の音モウなる故なる牛鳴の字なる牛鳴なる訓なる駒コマなる本語なる

コウマ　コウマ　コ　犬の異　故　男馬　又　将棋の駒　コ　ふ　コ　圍　マ　向
　　向　圍　名　名　童子の持翫　棋　コ　ふ　コ　凝　コ　マ　圍
凝　圍　名　コマ　コマ　コマ　コマ　活用　困　の詞　其　ます

○犬

イヌ　イ　犬　イ　義　又　貫　牝牡　交合　氣貫　離　名
　　イヌ　犬　又　貫　又　貫　氣　搦合　貫　狼
大口麻嚙　故　大字　マの義　訓　大馬鏡　訓　是　扱婚姻　犬張
子　檢　衣張　茅　用　垂　蒲　契　機　織　同　故　モタ　機
其　訣　縱　糸　水　妻　縛　糸　火　男　是　與　機　織　是　與
　　契　ども　衣張　縱　字　水　檢　縛　宰　火　則　水火　其
水火　衣　張　其　水火　夫婦　此義　檢　衣張　用

狗の如く健　児　多儲の異　犬張子　用　ホシシの約　シ　シルシの約　シ
　　子　異合　赤シ　子　子　夫婦のシルシ　賀　其　異の異合
集　婚姻の式　ま　形

○猪　鹿　猿　狐

井　水大の異　陸中の陽獸　大　活用　故　牙　角
首　動　走　鹿　屋　シカ　シカ　シカの反サ　昇水の異
陸獸　水　活用　角　能走　水　字　角　牛　角　陸　字
春角　落　秋　能聲　名　是　カヤキ　「鹿島従加世雲霧而
春日奈留三笠山ホ跡追曽陀流　是　カセギ　セキの反シ　カシ
是　文　唱　力　侈　猪　井シシ　鹿　カノシシ　猪ノシシ　鹿ノシシ
形シシ　アシアシの二言の省　則四足の心　四足の総名　異国の獅子

四足の総名なり〳〵サヨシカなるサヨシカ短尾鹿なり男鹿なり鹿なり尾の短
きものなり男鹿なり短故に牡鹿の名なり男鹿なり書も宜なり〳〵マシラ〳〵
シラの反サヨシカマサルなり清用天なり諸獸に勝る四足なり手の如く能働の
名なり亦サルなるマシラの尾大なるなり形の大なるなりマシラなるサルの中なり
形の小なるなるサルなり別なるなり如是なり〳〵キツネなるなり氣なり〳〵列なる子なる
根なる天地萬物の氣の根なる續列の名なり故に命長此獸稲荷神仕なる
十りの氣なる十りの反二なる出る水火の二の御名なり稲なる息根なり荷なる荷なり
故に稲荷と書此神天地の水火
萬物の命なる字なる
水火の傳なる此神なり故に此神に仕亦一名キツネなるあり氣なる〳〵ハム
の反の〳〵なる戯なる能人なる惑の名なり則野狐なるなり
目天傳久陀可計乃なる吉都なる野狐なる